

蕉門連句における大気現象

——阿羅野の場合——

田宮兵衛

1. はじめに

文学作品に出てくる大気現象の分析を、これを通じて人間と大気環境の関係に関わる情報を得ることを目的に行う。すでに筆者は芭蕉七部集における芭蕉が参加している連句について、そこに取上げられた大気現象の特徴を捉えようとしてきた(田宮1990,1992,1993)。芭蕉を対象とするのは最大の俳人であるからであり、七部集を取り上げるのは、最も著名な作品群であることによる。これらが現在まで読み継がれている理由が何であるにせよ、300年の寿命を持つ文学作品は、人間と大気環境の関係に関しても参考とすべきの情報を含んでいると考えている。なお、連句を対象としているのは、個人の作品ではないという文学作品としての特異な性格が、人間-環境関係の資料として、個人のバイアスの影響が相対的に低いと推測しているからである。

今回は芭蕉七部集の阿羅野に員外として掲載されている連句のうち、「雁がねも」を除く8歌仙と半歌仙1つを対象とし前報までと同様の報告を試みる。すなわち発句の初五によりそれらを示すと、「麦をわすれ」・「遠浅や」・「美しき」・「ほとゝぎす」・「月に柄を」・「落着に」・「初雪や」・「一里の」の8歌仙と半歌仙「我もらじ」である。これらの歌仙には芭蕉が参加していない。本文の題名を「蕉門連句における大気現象」とした理由である。なお、「雁がねも」については前掲(田宮1993)で報告した。

これらのうち大気現象を含んだ句を考察の直接の対象とするが、大気現象とは寺田(1932)が「俳句と天文」において示した「天文」の範囲とほとんど一致する。寺田が同論で「天文」としているのは、いわゆる天文学の「天文」ではなく、“meteor”に対応する天と地の間に起こる現象から天体に属するものを除いた範囲であり、寺田は

「所謂気象学的現象」としている。季語の分類では天文ばかりではなく、地理や時候に含まれるものもある。ただし本文では、前報までと同様、これら大気現象を季語の分類や連句の題材の分類から離れて、降水に関するもの、風に関するもの、天候をあらわすもの、気温表現となっているものの4つに分類する。

以下巻ごとに、具体的に句を見ていくに当たっては、まず、大気現象を含む句をその前後句とともに示す。大気現象を含む句は以下のように示す。各句に発句を1とした順番の番号を付す、長句は奇数、短句は偶数となる。大気現象についてはそれに下線を付す。また季については白石・上野(1990)により、記号で示す。すなわち、春 [f]、夏 [s]、秋 [h]、冬 [w]、雑句 [z]である。また、大気現象を含む句についてはそれが季語である場合*印を付すが、大気現象が複数ある場合はそのどちらが季語であるかまでは示せない。さらに、作者名を記す。使用する漢字体は白石・上野(1990)にならい原則として常用漢字であるが、黙読して句の切れ目が分かりやすくなる程度の振り仮名を付す。なお、2字以上の反復記号は漢字の場合は「々々」で置き換え、ひらがなの場合は、文字を還元する。

次いで大気現象を含む句(以下大気句)と前後句との関連を検討する。それに際しては、幸田(1983)、中村(1966)、白石・上野(1990)の注釈・校注を参考にした。ただし文中参考にしたことを示す場合は年次の表記を省略し、幸田は「露伴」、白石・上野は「白/上」として示す。各巻の最後に、作者別大気集中係数(対象歌仙中のある作者の作句数比で大気句数比 $\{=[同作者の大気句数]/[対象歌仙中の大気句数]\}$ を除いた値、作句数が異なってもこの値が1より大であれば平均より大気句を多く出していることになる)、季別大気集中係数(同前、ただし作者を季に読み替える)により、その巻の大気句に関する特徴を記

す。

なお、本文では連句の説明はほとんど行わないが、必要を感じられた場合は東(1978)、乾・白石(1980)、あるいは田宮(1990,1992,1993)等を参照されたい。

2. 歌仙各論

2-1. 「麦をわすれ」

本巻の発句は素堂である。これに越人が11句、野水・荷兮が各12句付けている。

1. 麦をわすれ華におぼれぬ雁ならし [f] 素堂
2. 手をさしさがす峰のかげろふ [f]* 野水
3. 籠の路もしどろに春の来て [f] 荷兮

第2句の季語かげろふは前句の春からの連想、後句も春の一風景である。

5. 門の石月待間のやすらひに [h] 野水
6. 風の目利を初秋の雲 [h] 荷兮
7. 武士の鷹うつ山もほど近し [h] 越人

第6句は、秋の雲が出ている空の下で風を予想(風の目利)している。前句は予想する人の状態を示し、後句は鷹狩用に子鷹を捕獲する(露伴・白/上)に際しては風の予想が必要ということにあらう。

9. 袋より経とり出す草のうへ [z] 荷兮
10. づぶと降られて過るむら雨 [z] 越人
11. 立ちかへり松明直ぎる道の端 [z] 野水

第10句のむら雨に対し、前句は雨が過ぎた後、袋の中の経が濡れたかどうか確かめる様子、後句は雨で予定が遅れ夜道にかかるので松明が必要になりそれを値切って買おうとしている様子としている(露伴・白/上)。むら雨は前後句ともに密接に関わる。

14. あてこともなき夕月夜かな [h] 野水
15. 露の身は泥のやうなる物思ひ [h]* 荷兮
16. 秋をなをなく盗人の妻 [h] 越人

第15句の露は秋の季語で前後句と関わるが、内容的には泥のやうなる物思ひが前句のあてこともなき、後句の泣くに関連する。

17. 明るやら西も東も鐘の声 [z] 野水
18. さぶうなりたる利根の川舟 [w]* 荷兮
19. 冬の日のてかてかとしてかき曇 [w] 越人
20. 冢子に行と羽織うち着て [w] 野水

第18句の寒うは後句の冬の日に通じる、前句とは鐘の声を舟に乗って聴いていると寒いと

いう関係である。第19句のかき曇は冬の日らしい天候として前後句に間接的に関わる。冢子は10月の猪の日に餅を食べ病無く子の多きことを祝う日のことである(露伴・白/上)。さらに「露伴」はこの頃天候が悪化することがあり、「ゐのこの荒れ」というと記している。

26. 秋になるより里の酒桶 [h] 野水
27. 露しぐれ歩鶴に出る暮かけて [h]* 荷兮
28. うれしとしのぶ不破の萬作 [z] 越人

第27句の露しぐれが大気現象である。この表現は結露の量が多いことを指しているものと考えられ、夕暮れの川縁の草にたくさん露が降りていることが前句の秋に対応する。後句との関係は、不破の萬作が関白秀次の小姓である(露伴・白/上)ことを知っても良く分からないが、露は特に関わりないようである。

なお、第30句に「火箸のはねて手のあつき也」[z]荷兮があるが、気温ではないので考察の対象ではない。

「麦をわすれ」の巻には大気現象は8つ、降水:5、風・天候・気温表現:各1である(第1.1表)。しかし、第6句は2つの大気現象を含むので句数としては7である。作者別大気集中係数(第1.2表)は荷兮に多く野水は少ないが、越人はほぼ平均的である。季別大気集中係数(第1.3表)では冬に特に大きい秋も大きい。雑句は0.32という値を示した。

第1.1表 「麦をわすれ」の巻、大気現象のリスト
(句順・作者・季)

降水	雲(6・荷兮・秋)、むら雨(10・越人・雑)、露(15・荷兮・秋)、かき曇(19・越人・冬)、露しぐれ(27・荷兮・秋)
風	風(6・荷兮・秋)
天候	かげろふ(2・野水・春)
気温表現	さぶう(18・荷兮・冬)

第1.2表 「麦をわすれ」の巻、作者別句数・作者別大気句数

	素堂	野水	荷兮	越人
句数	1	12	12	11
同%	2.8	33.3	33.3	30.6
大気句数	0	1	4	2
同%	0.0	14.3	57.1	28.6
大気集中係数	0.00	0.43	1.71	0.94

第1.3表 「麦をわすれ」の巻、季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑
句数	6	1	9	4	16
同%	16.7	2.8	25.0	11.1	44.4
大気句数	1	0	3	2	1
同%	14.3	0.0	42.9	28.6	14.3
大気集中係数	0.86	0.00	1.71	2.57	0.32

2-2. 「遠浅や」

本巻には、亀洞・荷兮・昌碧・野水・舟泉・釣雪の6名と執筆が参加し、舟泉の分から執筆に1句まわっているのが、他は6句ずつ作っている。また本巻は大気句が連続することが多い。

- 2. はるの舟間に酒のなき里 [f] 荷兮
- 3. のどけしや早き泊に荷を解て [f]* 昌碧
- 4. 百足の懼る薬たきけり [z] 野水
- 5. 夕月の雲の白さをうち詠 [h] 舟泉
- 6. 夜寒の蓑を裾に引きせ [h]* 釣雪
- 7. 萩の声どこともしらぬ所ぞや [h] 執筆

第3句で、のどけしやは天候の修飾も含めていると考えるが、前句とは春ののどかさという関わりである。舟→旅→荷→百足という主要な連関の流れの背後には春がある。百足は雨と関連するということが共通の理解である（露伴・白／上）とすれば、百足→雨→雲（第5句）となる。夕月と白い雲から夜寒が予想されると後句につながるが、日没後月光で雲が白く見えるような天気であれば晴天で夜間の放射冷却による気温低下が生じよう。これに対し、日没前の月と白雲を夜寒と結びつけることは難しい。第6句と第7句は秋と旅で二重に関連している。

- 12. 湯殿まいるのもめむたつ也 [s] 舟雪
- 13. 涼しやと蕙もてくる川の端 [s]* 野水
- 14. たらかされしやイる月 [h] 荷兮
- 15. 秋風に女車の髭おとこ [h]* 亀洞
- 16. 袖ぞ露けき嵯峨の法輪 [h]* 釣雪
- 17. 時々ものさへくはぬ花の春 [f] 昌碧

第13句、川端に涼みに出かけて来ると、出羽湯殿山参詣装束のための木綿の裁縫をしているとするが（露伴・白／上）、出羽とはいえ参詣の準備の裁縫をしている低地では夏は暑いので、川端で夕涼みすることに直接結びつけても無理ではなく、川端で裁縫する風景よりは単純で自然であろう。後句（第14句）は、夕涼み

とはいえ川端にむしろまで持って来て誰かを待っている状況は誰かにたぶらかされているという解釈である（露伴・白／上）。

第15句の秋風は月からの連想である。前句との関連は、女性用の車に髭面の男が乗っている、女性を期待するものはたぶらかされたことになる。後句（第16句）では、法輪寺への参詣のお供が髭面となるが、秋→露の関係が重なる。第16句と第17句の間連は参詣の目的が今日でいう拒食症の快癒であるらしいということで露は関わらない。

- 18. 八重山吹ははちなるべし [f] 野水
- 19. 日のいでやけふは何せん暖に [f]* 舟泉
- 20. 心やすげに土もらふなり [z] 亀洞

第19句は、暖かくなった春の日の出時分には今日は何をして過ごそうか、ということで、前句とはこの気分が花の盛りの山吹に呼応、後句では春の暖かな日に植木鉢の土でも入れ替えようとしたのか、土をもらおうということになる。

- 32. 水しほはゆき安房の小湊 [z] 亀洞
- 33. 夏の日や見る間に泥の照付て [s] 荷兮
- 34. 桶のかづらを入しまひけり [z] 昌碧

第33句の真夏の情景は前句の外房小湊に適する季節としてつけたものであろう。後句は日照り時に田に水をかける道具である桶のたがを修理したということである。

「遠浅や」の巻には8句に8つの大気現象が現れ、阿羅野員外歌仙中最も多い。降水：2、風：1、天候：2、気温表現：3である（第2.1

第2.1表 「遠浅や」の巻 大気現象リスト（句順・作者・季）

降水	雲（5・舟泉・秋）、露（16・釣雪・秋）
風	秋風（15・亀洞・秋）
天候	のどけし（3・昌碧・春）、照付て（33・荷兮・夏）
気温表現	余寒（6・釣雪・秋）、涼しや（13・野水・夏）、暖に（19・舟泉・春）

第2.2表 「遠浅や」の巻、作者別句数・作者別大気句数

	亀洞	荷兮	昌碧	野水	舟泉	釣雪	執筆
句数	6	6	6	6	5	6	1
同%	16.7	16.7	16.7	16.7	13.9	16.7	2.8
大気句数	1	1	1	1	2	2	0
同%	12.5	12.5	12.5	12.5	25.0	25.0	0.0
大気集中係数	0.75	0.75	0.75	0.75	1.80	1.50	0.00

第2.3表 「遠浅や」の巻, 季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑
句数	8	4	9	0	15
同%	22.2	11.1	25.0	0.0	41.7
大気句数	2	2	4	0	0
同%	25.0	25.0	50.0	0.0	0.0
大気集中係数	1.13	2.25	2.00	—	0.00

表)。作者別大気集中係数(第2.2表)は、2句の舟泉と釣雪が高い。季別大気集中係数(第2.3表)は夏が高く、秋、春の順に減る。本巻には冬の句がないので、冬の大気現象もない。

2-3. 「美しき」

本巻は舟泉・松芳・冬文・荷兮の4吟である。

2. 柳のうらのかまきりの卵 [f] 松芳
3. 夕霞染物とりてかへるらん [f]*冬文
4. けぶたきやうに見ゆる月影 [f] 荷兮

第3句、できあがった染め物を夕霞の時分に引き取りに行く際、柳の枝にカマキリの卵が見える。前句は霞には直接関わらないが、後句では月に霞がかかり煙ったように見えている。

15. なに事もうちしめりたる花の貞 [f] 荷兮
16. 月のおぼろや飛鳥井の君 [f]*冬文
17. 灯ともに手をおほひつ、春の風 [f]*舟泉
18. 数珠くりかけて脇息のうへ [z] 松芳

第15句は、おぼろに月が見える天候の時の情景として、前句で沈みこんでいる人物を飛鳥井の君(狭衣物語の登場人物であるそうだが、露伴・白/上)とした。第17句では春の夜、顔を見ようと掲げられる灯火を飛鳥井の君が手で遮っていることになる。第18句は、脇息の上に繰りかけていた数珠を置く理由を、前句の灯火が春風で消えそうになったので手で覆うためとした。なお、第15句の「うちしめる」は大気の湿度を表しているのではなく考察の対象とならない。

21. 山里の秋めづらしと生鰯 [h] 松芳
22. 長持かふてかへるや、さむ [h]*舟泉
23. ざぶざぶとながれを渡る月の影 [h] 荷兮

第23句は寒くなってきた頃長持ちを買って帰ると言うことであるが、帰る先は生鰯が珍しい山里である(前句)。後句が帰りの途を示すとすると、川には橋も無いので歩いて渡らなけ

ればならないような山の中となり、連句の禁忌である観音開きになる。したがって、「露伴」・「白/上」が言うように長持ちを婚礼用具として、めでたいので元氣な足取りでザブザブと川を渡るとせざるを得ない。いずれにしてもや、さむは秋を示す以上の役割はない。

24. 馬のとをれば馬のいな、く [z] 冬文
25. さびしさは垂井たなゐの宿の冬の雨 [w]*舟泉
26. 庭むらふまへて蕎麦あふつみゆ [w] 松芳

第25句、冬の雨の降る日は美濃路の起点の垂井であっても宿場は寂しい。前句の馬が通りすぎていななっていることからの連想である。後句は、宿場の一軒が、土間に敷いた庭で蕎麦をあおっているのが見えるのであるが、宿が忙しくはないのでやはり寂しい。

31. 黄昏の門かどさまたげに薪分 [z] 荷兮
32. 次第々々にあた、かになる [f]*冬文
33. 春の朝赤貝はきてありく見 [f] 舟泉

第32句は春日まじに暖かくなるということであるが、前句を夕刻門前での薪の分配が暖かくなったので、できるようになった(白/上)、不要になった(露伴)とどちらにも解釈できる。後句は暖かな春の朝子供が外で遊んでいる風景である。いずれも暖かくなったことが話の中心である。

「美しき」の巻には6句に6つの大気現象が出てくる。降水・気温表現:各2, 風・天候:各1(第3.1表)。作者別の大気句数(第3.2表)は舟泉と冬文が3つづつ出し、松芳と荷兮は0である。

第3.1表 「美しき」の巻, 大気現象のリスト(句順・作者・季)

降水	夕霞(3・冬文・春)、冬の雨(25・舟泉・冬)
風	春の風(17・舟泉・春)
天候	おぼろ(16・冬文・春)
気温表現	や、さむ(22・舟泉・秋)、あた、か(32・冬文・春)

第3.2表 「美しき」の巻, 作者別句数・作者別大気句数

	舟泉	松芳	冬文	荷兮
句数	9	9	9	9
同%	25.0	25.0	25.0	25.0
大気句数	3	0	3	0
同%	50.0	0.0	50.0	0.0
大気集中係数	2.00	0.00	2.00	0.00

第3.3表 「美しき」の巻、季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑
句数	10	1	7	2	16
同%	27.8	2.8	19.4	5.6	44.4
大気句数	4	0	1	1	0
同%	66.7	0.0	16.7	16.7	0.0
大気集中係数	2.40	0.00	0.86	3.00	0.00

季別の大気集中係数（第3.3表）を見ると、冬が3.00と高く、春の2.40がこれに続く。

2-4. 「ほとゝぎす」

この巻は荷兮、野水の両吟である。

1. ほとゝぎす待ぬ心の折もあり [s] 荷兮
2. 雨のわか葉にたてる戸の口 [s] 野水
3. 引き捨し車は琵琶のかたぎにて [z] 野水

脇で若葉の季節の雨の日戸を閉める理由は、発句が示すほととぎすに対する屈折した思いである。後句は雨のため閉めた戸の前に乗り捨ててある車の材料の話である。いずれにしても雨は戸を閉める理由となっている。

5. 月の秋旅のしたさに出る也 [h] 荷兮
6. 一荷になひし露のきくらげ [h]*野水
7. 初あらしはつせの寮の坊主共 [h]*野水
8. 菜畑ふむなとよばりかけたり [z] 荷兮

第6句の露は前句の秋を受けるだけである。前句の旅からの連想で荷が出てくるのであろうが、ここではきくらげを商う旅になっている（白/上）。第7句は長谷寺の坊主達が、強風下きくらげを担っている風景になる。後句はその坊主達が畑に踏み込んだ人に文句を言っている（露伴・白/上）、あるいは彼らが畑に踏み込んで文句を言われているので、初あらしとは関係なく話が進んでいる。

21. 駒のやど昨日は信濃けふは甲斐 [h] 野水
22. 秋のあらしに昔浄瑠璃 [h]*荷兮
23. めでたくもよばれにけらし生身魄 [h] 野水

第22句、悪天の日古い浄瑠璃を謡うのは、前句の馬を運んできて嵐で足止めにあっている信濃・甲斐の人々で彼等是新曲情報を知らない。後句では昔の浄瑠璃が謡われているのは、高齢者のお祝いである生身魄の場面である。いずれにおいても秋のあらしはほとんど重要ではない。

26. きつきたばこにくらくらとする [z] 荷兮

27. 暑き日や腹かけばかり引結び [s]*荷兮

28. 太鼓たゝきに階子のぼるか [z] 野水

第27句は暑い夏の服装が腹掛けだけであるということであるが、前句のニコチンで頭がくらくらしていることを、暑さで頭がくらくらすることもあることから夏の場面に変えている。太鼓の演奏者が腹掛けをするというのは今でも不思議ではないが夏祭りで山車の梯子を登っているところか。

「ほとゝぎす」の巻には5句に5つの大気現象が出てくる。降水：2・天候：2・気温表現：1であり、風はない。（第4.1表）。作者別の大気句数（第4.2表）は荷兮2、野水3である。季別の大気集中係数（第4.3表）を見ると、夏が4.80と高く秋も3.09と高いが、春の大気現象は無く、本巻には冬の句はない。

第4.1表 「ほとゝぎす」の巻、大気現象のリスト（句順・作者・季）

降水	雨（2・野水・夏）、露（6・野水・秋）
風	なし
天候	初あらし（7・野水・秋）、秋のあらし（22・荷兮・秋）
気温表現	暑き日（27・荷兮・夏）

第4.2表 「ほとゝぎす」の巻、作者別句数・作者別大気句数

	荷兮	野水	執筆
句数	17	18	1
同%	47.2	50.0	2.8
大気句数	2	3	0
同%	40.0	60.0	0.0
大気集中係数	0.85	1.20	0.00

第4.3表 「ほとゝぎす」の巻、季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑
句数	5	3	7	0	21
同%	13.9	8.3	19.4	0.0	58.3
大気句数	0	2	3	0	0
同%	0.0	40.0	60.0	0.0	0.0
大気集中係数	0.00	4.80	3.09	—	0.00

2-5. 「月に柄を」

この巻は傘下と越人の両吟である。

3. とつくりを誰が置かへてころぶらん

[z] 傘下

4. おもひがけなきかぜふきのそら [z] 傘下
 5. 真木柱つかへおさへてよしか、り[z] 越人

第4句は突然風が吹いてきたということである。その結果前句で思いがけないところに置きかえられていたとっくりが倒れたとすれば、倒したのは突風に驚いた人であり「露伴」は舟中の出来事にしている。しかし、あまりにも不安定な場所においたため舟に限らず突風に際してとっくりが倒れたと考えることも可能であろう。後句は源氏物語檣柱の巻に荒天の記述があるので、そこに突風を当てはめた（露伴・白/上）となる。

17. 花の賀にこらへかねたる涙落つ [f] 傘下
 18. 着もの、糊のこはき春かぜ [f]* 越人
 19. うち群て浦の苫屋の塩干見よ [f] 越人

第18句は、堅くこわばった糊の強くきいた着物を、穏やかな春風の中で着ているというミスマッチの面白さである。糊のきいた着物を着た人は、前句では花の季節の長寿の祝い、後句では大勢での潮干狩り、といずれも春の行事に参加している。

21. 酔ざめの水の飲たき比なれや [z] 傘下
 22. たゞしづかなる雨の降出し [z] 越人
 23. 歌あはせ独鉈鎌首まいらるゝ [z] 越人

第22句の雨は音もなく静かに降り出したのであるから層雲性である。前句の、酔い醒めで夜中に目を覚ましたらのが渴いていて水が飲みたかったということ、ありそうな雰囲気ではあるが雨とは直接は結びつかない。後句は建久4（1193）年の顕昭寂蓮の歌合わせのことだそう（露伴・白/上）あるが、激しい論争の始まろうとする瞬間を対照的に静かな天候に對置したのであろう。

26. 白をおこせばきりぎりす飛 [h] 越人
 27. ふく風にゑのころぐさのふらふらと [h] 越人
 28. 半はこはす築やまの秋 [h] 傘下

第27句ではえのころぐさが秋風に揺れている。前句には秋の情景で対応、後句は、えのころぐさが生えている場所を改造中の築山とした。

「月に柄を」の巻には4句に4つの大気現象が出てくる。降水：1，風：3で、天候・気温表現はない。（第5.1表）。作者別の大気句数（第5.2表）は越人・傘下各2である。季別の大気集中係数（第5.3表）を見ると、春が1.80、

秋も1.29とやや高いが、夏の気象句はなく、本巻には冬の句はない。雑句の集中係数が0.90というのは、一般に雑句に大気現象が出にくい傾向があるので高い値といえる。

第5.1表 「月に柄を」の巻、大気現象のリスト（句順・作者・季）

降水	雨（22・越人・雑）
風	かぜふき（4・傘下・雑）、春かぜ（18・越人・春）、ふく風（27・越人・秋）
天候	なし
気温表現	なし

第5.2表 「月に柄を」の巻、作者別句数・作者別大気句数

	越人	傘下	執筆
句数	18	17	1
同%	50.0	47.2	2.8
大気句数	2	2	0
同%	50.0	50.0	0.0
大気集中係数	1.00	1.06	0.00

第5.3表 「月に柄を」の巻、季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑
句数	5	4	7	0	20
同%	13.9	11.1	19.4	0.0	55.6
大気句数	1	0	1	0	2
同%	25.0	0.0	25.0	0.0	50.0
大気集中係数	1.80	0.00	1.29	—	0.90

2-6. 「落着に」

この巻は其角と越人の両吟である。大気現象が出てくる句は2句と少ない。

1. 落着に荷兮の文や天津雁 [h] 其角
 2. 三夜さの月見雲なかりけり [h] 越人
 3. 菊萩の庭に畳を引ずりて [h] 越人

脇（第2句）は十四・十五・十六夜の月見が雲に邪魔されることもなくできたと言っている。更科の旅に随行した越人を伴って芭蕉が其角を訪れた際、到着時のもてなし（落着）に茶菓ではなく荷兮の便りを見せるという其角の発句への、越人の返礼である。更科での体験の報告をもって挨拶とただけなので、発句と脇の間に雲は直接関係しない。晴天が続くので、後句では秋の庭に蓐藁を敷いて月見をしている。

29. 満月に不断桜を詠めばや [h] 其角

30. 念者法師は秋のあきかぜ [h]* 越人

31. 夕まぐれまたうらめしき紙子夜着 [z] 越人

念者法師とは男性同性愛者の一方のこと（白石）で、その心変わりを秋風とするのが第30句、前句の年中変わらぬ不断桜と対比させた。後句は、秋風から引き続き、心変わりについて具体的に述べているとする（白石）。

本巻の大気句はいずれも越人による秋の句で、降水・風：各1である（第6.1表）。越人の作者別大気集中係数は1.89（第6.2表）、秋の季別大気集中係数は4.00（第6.3表）という値になる。

第6.1表 「落着に」の巻、大気現象のリスト（句順・作者・季）

降水	雲（2・越人・秋）
風	あきかぜ（30・越人・秋）
天候	なし
気温表現	なし

第6.2表 「落着に」の巻、作者別句数・作者別大気句数

	其角	越人
句数	17	19
同%	47.2	52.8
大気句数	0	2
同%	0.0	100.0
大気集中係数	0.00	1.89

第6.3表 「落着に」の巻、季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑
句数	2	1	9	1	23
同%	5.6	2.8	25.0	2.8	63.9
大気句数	0	0	2	0	0
同%	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0
大気集中係数	0.00	0.00	4.00	0.00	0.00

2-7. 「我もらじ」

この巻は嵐雪と越人による半歌仙である。

1. 我もらじ新酒は人の醒やすき [h] 嵐雪
2. 秋うそ寒しいつも湯嫌 [h] 越人
3. 月の宿書を引ちらす中にねて [h] 越人

脇では風呂が嫌いな人が、うそ寒いので暖まるために発句の新酒を欲しがっている。後句で、月の光が射し込む部屋に書物を散らかしたまもうたた寝し、寒くて目を覚ましたのもやはり風呂が嫌いな人である。

8. 唱歌はしらず声ほそりやる [z] 嵐雪

9. なみだみるはなればなれのうき雲に [z] 嵐雪

10. 後ぞひよべといふがわりなき [z] 越人

第9句で浮き雲が離ればなれになっているのを見て別れの悲しみに涙を流すのを前句の歌の内容と解釈するらしい（露伴・白／上）が、そうすると浮き雲は単に歌の題材の一つに過ぎない。その別れの悲しみが表現しているのは、再婚をすすめられ、それを無理なことと感じている後句の人物の心境である。

14. 明日は髪そる宵の月影 [h] 越人

15. しら露の群て泣める女客 [h]* 越人

16. つれなの医者の後姿や [z] 嵐雪

第15句に集まった女客達は、前句では剃髪する人の白露のごとき運命に泣き、後句では死者を悼んで泣きながら、すぐに退席していく医者その後ろ姿につれなさを感じている。

この巻は半歌仙でも大気現象が3つあり、降水：2、気温表現：1（第7.1表）、越人2句、嵐雪1句である（第7.2表）。季別では秋に集中し、夏・秋はそもそも句が無く、春は大気句がない。

第7.1表 「我もらじ」の巻、大気現象のリスト（句順・作者・季）

降水	うき雲（9・嵐雪・雑）、しら露（15・越人・秋）
風	なし
天候	なし
気温表現	寒し（2・越人・秋）

第7.2表 「我もらじ」の巻、作者別句数・作者別大気句数

	嵐雪	越人
句数	8	10
同%	44.4	55.6
同大気句数	1	2
同%	33.3	66.7
大気集中係数	0.75	1.20

第7.3表 「我もらじ」の巻、季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑	合計
句数	2	0	6	0	10	18
同%	11.1	0.0	33.3	0.0	55.6	100.0
大気句数	0	0	2	0	1	3
同%	0.0	0.0	66.7	0.0	33.3	100.0
大気集中係数	0.00	-	2.00	-	0.60	1.00

雑句は0.60と比較的高い集中係数である（第7.3表）。

2-8. 「初雪や」

野水・落梧の両吟である。

1. 初雪やことしのびたる桐の木に [w]*野水
2. 日のみじかきと冬の朝起 [w] 落梧
冬は日が短いので朝早起きをする、というのが脇である。そのとき目にはいったのが、初雪が今年成長した桐の木に着雪しているという発句の様子である。
6. あらことごとし長櫃の萩 [h] 落梧
7. 川越の歩にさゝれ行秋の雨 [h]*野水
8. ねぶと痛がる顔のきたなき [z] 落梧
第7句は川越人足の夫役に指名され秋の雨の中を行く姿である。彼が運ばされているのが前句の大袈裟に長櫃に入れた萩である。後句では彼に痛くて顔をしかめるほどのねぶとができていことが分かる。秋の雨は運が悪い状態の象徴であろう。
15. 煮た玉子なまのたまごも一文に [z] 野水
16. 下戸は皆いく月のおぼろけ [f]*落梧
17. 耳や歯やようても花の数ならず [f] 野水

第16句を、お酒の飲めない人もおぼろ月を見に出かけていく様子と「白/上」ではしている。その動機の一つが、前句で卵をやすく売っていることになるらしい。他方、「露伴」は、「いく」を「往く（去る）」と解し、おぼろ月で雨が降りそうなので、前句の道ばたで商いをしている卵売りをよそに、下戸は帰りを急ぐとする。大気現象の観点からは後者を採るべきであろう。後句では、老人が耳や歯がまだ丈夫でもおぼろ月夜の花見に出かけるには衰えたと言っている（露伴・白/上）。

26. かゝる府中を鮎ねぶり行 [z] 野水
27. 雨やみて雲のちぎる、面白や [z] 落梧
28. 柳ちるか例の蓮道 [h] 野水

第27句は雨がやんだ後の雲がちぎれるように吹き飛ばされて行く空の様子である。前句を風狂の行為として、この光景に対応させたと考えるようである（露伴・白/上）。後句はその光景を秋として、風流人が柳の葉が散り落ちるのを見に行くとする。「例の蓮道」は枕草子でこのような状況に使われる表現であるとのことである（露伴・白/上）。

34. 誰より花を先へ見てとる [f] 落梧
35. 春雨のくらがり峠こえすまし [f]*野水
36. ねぶりころべと雲雀鳴也 [f] 落梧

第35句は、春雨の中生駒山中のくらがり峠を越えて来たということである。他の人より早く麓に着けば前句のように桜を先に見ることができる。挙句では春雨のあがった後、雲雀が眠りを誘うように鳴いている。

「初雪や」の巻には大気現象が6つ出てくるが、第27句に2つあるので大気句数は5である。大気現象のうち5つが降水であり、他は天候：1である（第8.1表）。作者別のバランスはとれているが（第8.2表）、季別には夏の句がなく集中係数は冬が3.60と高く、春も2を越える。雑句は0.34を示した（第8.3表）。

第8.1表 「初雪や」の巻、大気現象のリスト（句順・作者・季）

大気現象	内容
降水	初雪（1・野水・冬）、秋の雨（7・野水・秋）、雨・雲（27・落梧・雑）、春雨（35・野水・春）
風	なし
天候	おぼろげ（16・落梧・春）
気温表現	なし

第8.2表 「初雪や」の巻、作者別句数・作者別大気句数

	野水	落梧
句数	18	18
同%	50.0	50.0
大気句数	3	2
同%	60.0	40.0
大気集中係数	1.20	0.80

第8.3表 「初雪や」の巻、季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑
句数	7	0	6	2	21
同%	19.4	0.0	16.7	5.6	58.3
大気句数	2	0	1	1	1
同%	40.0	0.0	20.0	20.0	20.0
大気集中係数	2.06	—	1.20	3.60	0.34

2-9. 「一里の」

この巻は、一井・鼠弾・胡及・長虹の四吟である。2つの大気現象を含む句が4つもあり、このことはかなり珍しい。

1. 一里の炭売はいつ冬籠り [w] 一井

2. かけひの先の瓶氷^{かめ}る朝 [w]* 鼠弾
 3. さきくさや正木を引に誘ふらん [z] 胡及
 脇は、冬の朝掛樋の水を受ける瓶が寒くて凍っているということである。この場合掛樋の水も凍っているはずでありかなりの寒さである。この寒さに、発句は冬の間寒さを押して一村を挙げ炭売りに熱心に働く姿に驚いている。後句はその寒い朝の風景である。「露伴」は女兒が神楽歌の寒稽古に誘い合うとするが、「白／上」のように山仕事の誘いとする解釈が多いようである。

11. うとうとと寐起ながらに湯をわかす [z] 胡及
 12. 寒^さゆく夜半の越の雪^{ゆき}鋤 [w]* 長虹
 13. なに事かよばりあひてはうち笑ひ [z] 鼠弾

第12句、日本海沿岸の多雪地帯では寒い夜の間にも雪掻きする、ということである。夜半急に雪が降り出した場合には、寝ているものも起こされることなるので前句につながり、後句は夜間の雪掻きの様子である。

14. 蛤とりはみな女中也 [z] 一井
 15. 浦^{うら}風に^{はき}吹まくる月涼^{つきすず}し [s]* 長虹
 16. みるもかしこき紀伊の御魂屋^{おたまや} [z] 胡及

第15句は月が出ている海岸で涼んでいる様子である。涼んでいるのは、前句で蛤を採っていた女達である。後句は涼んでいる場所を和歌浦の東照大権現（御魂屋）が望める所とする（露伴・白／上）。

26. まくらもせずについ寐入月 [h] 鼠弾
 27. 暮^{くれ}過て障子の陰のうそ寒^さき [h]* 胡及
 28. こきたるやうにしほむ萩のは [z] 長虹

第28句は日が暮れて障子に月影が映り寒くなってきたということである。そうなるのは、前句でうたた寝をしていたからであり、後句は寒さで萩の葉がしごいたように凋んでいる様子を示す。

31. 毒なりと瓜一^{くは}きれも喰^{くは}ぬ也 [s] 長虹
 32. 片風^{かたかぜ}たちて過る白^{しろ}雨 [s]* 胡及
 33. 板へぎて踏^ふ所なき庭の内 [z] 一井

第32句は夏一陣の風を伴った夕立が過ぎていったということであるが、片風は風の名称としては定着していない。しかしながら、この風を雨滴に引きずられて急降下してくる空気塊がもたらす近年ダウンバーストとして注目されて

いる強風とすると、この風は固定点に対しては1方向から吹くので片風という名称は適切かもしれない。前句の体を冷やすから毒ということので一切れの瓜もたべられない人には夕立と風は有り難い現象であろうが、庭先で板をへぐ作業をしている後句では木片が吹き散らかされるので大いに迷惑であろう。

34. はねのぬけたる黒^{くろ}き唐丸^{たうまる} [z] 鼠弾
 35. ぬくぬくと日足のしれぬ花曇^{はなぐら} [f]* 長虹
 36. 見わたすほどはみなつ・じ也 [f] 胡及

第35句は、花曇りの春の暖かい日であるが曇っているので日足から時刻を知ることができないといっている。前句の老いて羽根の抜けた闘鶏用の鶏が居る場所の雰囲気を示す。また後句はその日見渡す限りつつじが満開であるとした。

本巻には大気現象が10（降水：3，風：2，気温表現：5）あるが、先にも述べたとおり、4句が2つの現象を含むので、大気句数は6である

第9.1表 「一里の」の巻、大気現象のリスト（句順・作者・季）

現象	句数	作者	季
降水	雪鋤 (12・長虹・冬), 白雨 (32・胡及・夏), 花曇 (35・長虹・春)		
風	浦風 (15・長虹・夏), 片風たちて (32・胡及・夏)		
天候	なし		
気温表現	氷る (2・鼠弾・冬), 寒ゆく (12・長虹・冬), 涼し (15・長虹・夏), うそ寒き (27・胡及・秋), ぬくぬくと (35・長虹・春)		

第9.2表 「一里の」の巻、作者別句数・作者別大気句数

	一井	鼠弾	胡及	長虹
句数	9	9	9	9
同%	25.0	25.0	25.0	25.0
大気句数	0	1	2	3
同%	0.0	16.7	33.3	50.0
大気集中係数	0.00	0.67	1.33	2.00

第9.3表 「一里の」の巻、季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑
句数	5	4	6	3	18
同%	13.9	11.1	16.7	8.3	50.0
大気句数	1	2	1	2	0
同%	16.7	33.3	16.7	33.3	0.0
大気集中係数	1.20	3.00	1.00	4.00	0.00

(第9.1表)。作者別大気集中係数は長虹に高い(第9.2表)。季別では冬が4.00, 夏が3.00と高い(第9.3表)。

3. 全体集計とそれについての考察

本節ではここまで見てきた阿羅野員外連句中の芭蕉不参加の8歌仙と1半歌仙の全大気句について季別・作者別に集計し、そこに顕れた特徴について考察する。

まず第10.1表に対象とした歌仙の合計306句の季別内訳と、各季それぞれの全体に対する割合を示し、また季別の大気句数とその合計46句に対する割合(全句数比)を示した。さらに同表にこれらによる季別大気集中係数を示した。この表からは、各歌仙について見てきた特徴が見られる。たとえば、大気現象は基本的に季と結びついており、大気現象があるのに季がない雑句というものは作りにくいので、雑句は数が多い割には、大気現象が少なくなる。雑句の大気集中係数は0.21と低い。逆に各季の集中係数はいずれも1以上で、冬・夏・秋・春の順になっている。連句の式目(約束事)により春・秋の句数は多くなるのでその結果係数が低い値を示す可能性があるが、冬の係数値が最高であることは今後検討すべき問題であろう。

第10.1表 阿羅野芭蕉不参加の歌仙、季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑	合計
句数	50	18	66	12	160	306
同%	16.3	5.9	21.6	3.9	52.3	100.0
大気句数	11	6	18	6	5	46
同%	23.9	13.0	39.1	13.0	10.9	100.0
大気集中係数	1.47	2.20	1.81	3.33	0.21	1.00

次に作者別の大気句数について検討する。まず、第10.2表に作句数の多い越人・野水・荷兮の巻別の句数、合計句数、全句数306に対する割合を示す。この3者に次ぐのは傘下・其角・落梧であるが、いずれも両吟の一方として1歌仙に登場するだけなので、句数は17ないし18である。第10.3表は越人・野水・荷兮の巻別の大気句数であるが、8ないし7と似た数になった。同表には併せて他の作者の合計大気句数及び巻別合計の大気句数、3者の大気句のそれに対する割合(全大気句数比)、

それを全句数比で除した大気集中係数も示した。3者いずれも似た数であるが荷兮の集中係数のみわずかに1より大きい。1歌仙にしか参加していない先の3者の大気集中係数は、傘下0.78・其角0.00・落梧0.94, また3者以外の合計に対する値0.98という結果も含め、先程まで述べてきた個々の歌仙における係数との関連づけは今後の課題としたい。

第10.2表 越人・野水・荷兮巻別作句数

	越人	野水	荷兮
麦をわすれ	11	12	12
遠浅や	—	6	6
美しき	—	—	9
ほとゝぎす	—	18	17
月に柄を	18	—	—
落着に	19	—	—
我もらじ(半)	10	—	—
初雪や	—	18	—
一里の	—	—	—
計	58	54	44
全句数比%	19.0	17.6	14.4

第10.3表 越人・野水・荷兮巻別大気句数と大気集中係数

	越人	野水	荷兮	他	合計
麦をわすれ	2	1	4	—	7
遠浅や	—	1	1	6	8
美しき	—	—	0	6	6
ほとゝぎす	—	3	2	—	5
月に柄を	2	—	—	2	4
落着に	2	—	—	0	2
我もらじ(半)	2	—	—	1	3
初雪や	—	3	—	2	5
一里の	—	—	—	6	6
合計	8	8	7	23	46
全大気句数比%	17.4	17.4	15.2	50.0	
全句数比%	19.0	17.6	14.4	49.0	
大気集中係数	0.91	0.99	1.06	0.98	

阿羅野員外の歌仙のうち芭蕉と越人の両吟「雁がねも」については、田宮(1993)で検討したが、参考までに本文と同じ形式で表を示し(第11.1~3表)、特徴を述べておく。現れた大気現象は、降水:3, 風:1, 天候:2で気温表現はない。重

第11.1表 「雁がねも」の巻、大気現象のリスト(句順・作者・季)

降水	雨(12・越人・雑), 露(26・芭蕉・夏), 雲(28・芭蕉・雑)
風	風(6・芭蕉・雑)
天候	師走の空(9・芭蕉・冬), うはの空(29・越人・秋)
気温表現	なし

第11.2表 「雁がねも」の巻、作者別句数・作者別大気句数

	越人	芭蕉
句数	18	18
同%	50.0	50.0
大気句数	2	4
同%	33.3	66.7
大気集中係数	0.66	1.33

第11.3表 「雁がねも」の巻、季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑
句数	5	2	7	1	21
同%	13.9	5.6	19.4	2.8	58.3
大気句数	0	1	1	1	3
同%	0.0	16.7	16.7	16.7	50.0
大気集中係数	0.00	3.00	0.86	6.00	0.86

複出現もないので大気句数は6である。このうち4句は芭蕉による。季別では春が無く、他の3季は各1句あるが大気集中係数は句数の少ない冬が6.00、夏が3.00となる。雑句が3句あり集中係数は0.86と高いほうである。

4. おわりに

今回、分析結果の一端を集中係数という値で示すことを試みたが、冬の句に大気現象が集中する傾向が明確になった。しかしながら作者別の集中係数からは特段の結果は得られていない。今のところ芭蕉七部集全体にこれを適用すれば、何らかの知見が得られることを期待している。なお本文中で集中係数とした値は我国の経済地誌学等では特化係数という述語が与えられているが、歌仙の季等の考察においては特化という表現は意味をなさないので、あえて集中係数とした。

他方、一つ一つの句および前後句との関連は、個別に眺めた程度に止まっており考察の段階に達

しているとは言い難い。七部集における連句は、正式の歌仙37の他百韻1つ、34句で終わったものの1つ、半歌仙1つ、6句からなる追加2つがある。このうち芭蕉が3句以上参加している17歌仙と追加の1つについては前報までの3つの報告で一応の考察を加えた。本報では歌仙8と半歌仙1についてみたので、残されているのは、歌仙12、追加1、百韻1である。引き続き本報と同様の作業を行うとともに、句の内容に立ち入った上での考察も行いたい。

本報告を1999年3月をもってお茶の水女子大学を御退官になる千歳壽一教授に捧げる。同教授の在任期間は十年に満たなかったが、御着任時の所属と御退官時の所属に変化があった。本報に連なる一連の3つ報告をやはり御退官に当たり捧げた諸先達には数十年の在任期間中所属の変化は無かった。本報を地理学科の消滅に際して何等かの感慨を抱く機会を共有することとなった千歳教授への惜別の辞に代える。

文献

- 東 明雅(1978):『連句入門 芭蕉の俳諧に即して』, 中央公論社, 221P.
- 乾 裕幸・白石悌三(1980):『連句への招待』, 有斐閣, 259P.
- 幸田成行(1983):評釋曠野(『評釋芭蕉七部集』露伴全集第20巻~第23巻), 岩波書店, 462P.
- 白石悌三・上野洋三校注(1990):『芭蕉七部集(新日本古典文学大系70)』, 岩波書店, 650+49P.
- 田宮兵衛(1990):『猿蓑』の連句における大気現象について. お茶の水地理, 31, 9-15.
- _____ (1992):『冬の日』における大気現象について. お茶の水地理, 33, 17-25.
- _____ (1993):芭蕉七部集の歌仙における大気現象について—『阿羅野』・『ひさご』・『炭俵』・『続猿蓑』の場合—. お茶の水地理, 34, 8-20.
- 寺田寅彦(1932):天文と俳句. 俳句講座.(『寺田寅彦全集第七巻』, 岩波書店(1950)), 558-570.
- 中村俊定校注(1966):『芭蕉七部集』, 岩波書店, 446P.